

発表抄録

〈一般研究〉

明治期のスポーツ用品卸売商カタログに関する考察

—加島屋商店戸外遊技品定価表を題材に—

○ 中田 賢一（新潟医療福祉大学大学院）

明治期（1800年代後半）に製造・販売が始まったとされているわが国の「スポーツ用品」であるが、その発端や経緯や事情を追った研究は多くない。1882年に創業し製造・販売の老舗「美満津商店」については資料が幾分残っていた事もあり明らかにされてきている。

しかし、二番煎じである「加島屋商店」1899年創業について言えば文献が無に等しい。それらを踏まえ、加島屋、後の「イシイ・カジマヤ」を研究対象としている。本研究では、1902年に加島屋が発行（改定）した「戸外遊技品定価表」から当時のスポーツ用品を考察した。現存するスポーツ用品カタログとしては最古（美満津）に並ぶものである。考察点としては、スポーツ用品でも運動具でもなく「戸外遊技品」と呼称されていた、野球とテニスを主体的に扱っていた事、価格帯としては安価なものではなかった、加島屋における戸外遊技品は後発の事業であった事を考察した。

B 大学柔道競技者のストレスコーピングとハーディネスの関連性

○ 西田 健介（国際武道大学大学院）、前川 直也、大矢 稔（国際武道大学）

本研究は、B大学柔道競技者100名（男子80名、女子20名）を対象に、尾関(1993)のコーピング尺度と山口(2016)のハーディネス尺度を用いて調査を行い、ストレスコーピングとハーディネスのそれぞれの特性とその関連性について明らかにすることを試みた。各下位尺度の関連性を検証するためにストレスコーピングを従属変数とし、重回帰分析を試みた。結果として、問題焦点型ではチャレンジ因子との有意差がみられ、チャレンジ因子が高いほど問題焦点型のストレスコーピングを行いやすいという結果となった($\beta = .366, p < .01$)。情動焦点型では、コミットメント因子との有意差がみられ、コミットメント因子が低いほど情動焦点型のストレスコーピングを行いやすいという結果となった($\beta = -.206, p < .05$)。今後は、より詳細な検証が必要であると言える。

スポーツ指導者の資格と制度に関する研究

○馬場 宏輝（帝京平成大学）

スポーツ指導者資格とは、指導者が一定の知識・技能を有することを証明するものである。スポーツ界では一般的に試験に合格し資格認定することを「指導者制度」と呼ぶが、これは制度と呼べるものなのだろうか。筆者はこれまで資格と制度の歴史的な変遷に関する背景やスポーツ指導者の現状・実態について研究成果を発表し資格に関する課題・問題点も指摘してきた。しかしながら資格は制度に影響されることから、制度そのものについて検討しないと資格の議論に進展しないと考えている。

体育・スポーツ経営学におけるスポーツ指導者は、体育・スポーツ事業を展開するための人的資源であるが、スポーツ指導者にどのような資格を付与し、どのように組織や事業において資格を機能・活用させるべきかという制度に関わる理論は提供されていない。

そこで、制度から資格を検討するために、隣接研究領域の制度分析・制度研究の援用について検討したい。

起床時体温低値児の心臓自律神経系機能及び身体活動特性について

○小泉 佳右（千葉大学国際教養学部）、真鍋 求（東京外国語大学）

【目的】起床時体温が低い幼児を対象にして、一日の体温変動、身体活動量および心臓自律神経系機能の特性を調査することを目的とした。

【調査 1】幼稚園年長児を対象とし、平日の起床直後、登園直後、昼食直前、夕食直前および就寝直前の鼓膜温を測定した。起床直後の鼓膜温が、集団の平均から標準偏差を減じた値よりも低い値を示した 9 名を起床時体温低値群とし、平均以上の値を示した 35 名を比較対照群とした。その結果、起床時体温低値群では、夕食直前および就寝直前でも比較対照群より低値を示した。

【調査 2】追跡調査に対して協力が得られた各群 8 名ずつに対して、身体活動量および心臓自律神経系機能の調査を実施した。その結果、起床時体温低値群では夕方の時間帯の歩数が有意に少なく、掌握運動中の心臓副交感神経活動指標が有意に低値であった。

【まとめ】本研究の起床時体温低値児の全体傾向として、降園後夕方の歩数が少なく、夕方及び就寝前の体温が低いことが示唆された。

〈実践報告〉

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けた国際武道大学の取り組み

○廣瀬 恒平（国際武道大学）

本実践報告ではオリンピック・パラリンピック競技大会におけるボランティア活動に焦点を当て、国際武道大学および国際武道大学ラグビー部が東京 2020 年大会に向けてどのように参画貢献を行うかについて検討した内容を報告した。

オリ・パラに関する調査結果から、以下の内容が挙げられた。

- ①一般市民におけるオリンピックへの関心は高いものの、ボランティア参加希望率は低い。
- ②これに比べ体育大生のスポーツボランティア実施率、そして東京 2020 大会への参加希望率は高い。
- ③具体的に「何をしたい」「そのために何をすべきか」といったことをイメージできている学生は多くない。

2007 年より国際武道大学ラグビー部はウィルチェアーラグビー日本選手権のボランティア活動を行ってきた関係から、東京 2020 パラのウィルチェアーラグビーの競技ボランティアの打診を受けた。上の調査結果の傾向を踏まえ、日本ウィルチェアーラグビー連盟や東京 2020 大会組織委員会と連携を深めながら、競技ボランティアの役割を全うできるよう、活動の組織化・高度化を図ることが重要であると考えられる。

朝食・被服重量が体重・BMI に及ぼす誤差

○島田 美恵子、三宅 理江子（千葉県立保健医療大学）、中島 一郎（国際武道大学）

目的：地域開催の健康教室は体重測定時の条件を統一できない。本研究の目的は朝食・被服重量が体重・BMI に及ぼす誤差を定量化し、数値変動の意味を探ることである。

方法：地域在住高齢者 22 名に対し、前日の 21 時前に夕食を摂取させ、午前 8 時に空腹時の身長と脱衣での体重を測定した。指定の朝食を摂取後、着衣で体重を再測定した。

結果：対象者の平均着衣量は 0.52 ± 0.19 kg、平均朝食摂取量は 300 ± 130 g であった。脱衣朝食摂取前の BMI 平均値は 20.12 ± 2.60 、着衣朝食摂取後の BMI は 20.46 ± 2.64 kg/m^2 であった ($p < 0.01$)。平均変化量は初期値の 1.7 ± 0.4 (範囲 1.1 ~ 2.5) % であった。

考察：日本肥満学会では、1週間で1～2%以上の、1か月で5%以上の体重減少率を有意な体重変化と判定している。健康評価に際し、朝食・被服重量は概ね2%の誤差を生み出す可能性があることを留意できた。

千葉県大学サッカーリーグ1部におけるK大学の失点の分析朝食

○西園 聡史（国際武道大学）

I. はじめに 研究の背景

K大学学友会サッカー部は2017年千葉県大学サッカーリーグ1部、第50回関東大学サッカー大会での総失点は17失点であった。この現状はK大学サッカー部の問題、課題である。選手の発言からくる問題意識には「もっと失点を減らしたい。」このような声を聞いてきた。2017年シーズンは失点が少なかったものの拮抗した試合での失点が続いた。本研究の目的は、サッカーにおける失点に焦点をあて、選手が抱えている問題に答え、ゴールを守る守備の手がかりを得て、指導上の示唆を得ることである¹⁾。

I-II. 先行研究

サッカーの守備戦術に関する研究、得点に関する研究は、多数ある^{2) 3)}。しかしながら、失点した選手の考えを聞き、調査した研究は少ない。

II. 研究の方法

対象試合は、2017年千葉県大学サッカーリーグ1部でK大学が行った14試合、第50回関東大学サッカー大会、K大学が行った4試合、合計18試合を対象とした。試合は全てHDビデオカメラ（Panasonic デジタルビデオカメラレコーダー：HC-V360M）に記録した。以下の項目について分析を行った。

II-I. ゲーム分析

1) 失点内容、2) 失点に至るシュートが打たれた地点、3) 失点に至るシュート時のタッチ数、4) 失点に至るアシスト地点。

II-II. インタビュー

第三者Sが分析結果1)、2)、3)、4)を選手K、選手Y、選手Hに伝え、半構造化面接法を基にインタビューを実施した。結果を得た選手の変化を調査することを試みた。

III. 分析結果

2017年シーズンに行われた千葉県大学サッカーリーグ1部と第50回関東大学サッカー大会で行われた18試合の全17失点を対象に、失点シーンの分析を行った結果、以下のことがわかった。

1) 失点はオープンプレーからが9失点、セットプレーからが8失点。クロスからとコ

コーナーキックからの失点が多かった。

2) 失点に至るシュートが打たれた地点では、対象とした全 17 失点全てがペナルティエリア内で、その中でもゴールエリア中央とペナルティーマーク周辺からの失点が多かった。

3) 失点に至るシュート時のタッチ数では 1 タッチが 12 失点、2 タッチが 3 失点。

4) 失点に至るアシスト位置では、コーナーキック、両サイドの深い位置とペナルティエリアの角周辺からのアーリークロスが多かった。

IV. まとめ

1) から 4) の結果から失点した際のタッチ数では 3 タッチ以上相手がした場合の失点はなかった。17 失点中ワンタッチでの失点は 12 失点、そして、シュートが打たれた地点がゴールエリアからペナルティーマーク前であることが明らかになった。

よって、失点しないためには、分析結果 2)、3) からゴールエリア、ペナルティーマークで 2 タッチ以内のシュートを打たせない守備が求められる。この地域での失点を減らすことがチームの課題である。この課題を改善することが K 大学の 2018 年シーズンの失点の減少につながると考える。インタビューから回答者 K の発言「ゴール前でやらせてはいけないことが明確になった。相手の置き所を一步から半歩で詰められる距離に置く。」から失点結果を知り、守備のプレーの質を変えていることが示唆された。

今後、可能な限り失点直後の選手への映像を利用したインタビューの実施し、グラウンド上での選手の指導に活かしていく。

〈発展的研究〉

高等学校保健体育科教師の実態調査研究

ー保健・体育・部活動に着目してー

○金子 元貴 (千葉大学大学院)

I 緒言・目的

長年の間、保健学習の実態は低調だと言われ続け、今日に至ってもその改善策を見出すべく実態調査が行われている。低調だと言われる例は、近年ますます求められている思考力・判断力・表現力といった学力を育む活動が生徒たちの実感にないところにある。本研究では、これまであまり考慮されてこなかった、保健学習以外の実態も踏まえ、保健・体育・部活動の実態から、保健科教育あるいは保健体育科教育改善の方策を見出す。

II 研究方法

2018年6～7月にかけて、千葉県公立高校保健体育教師に質問紙調査を実施する予定である。予備調査として質問紙を客観的に評価するために、3名の現職教諭に質問に回答した上での意見を収集した。

Ⅲ 予備調査の結果

回答への負担や質問を大きく見直す必要は生じなかったが、行動科学あるいは保健と行動科学の関連性の理解に課題がありそうだと感じた。その他、得られた意見を参考にしながら、本調査での結果を慎重に考察していく必要がある。